

Ja-Net

April 2014 No. 69

季刊ジャネット

Ja-Net は Japanese Network の略です。「にほんご」を通して編集室と読者の皆様を結ぶ情報誌にしたいと考えています。

スリーイーネットワーク

Contents 目次

2014年4月25日発行

- View from the Other Side 3
マクファーソン・リーさん(カナダ)
- あちこち日本語ご紹介〈国内編〉..... 4
埼玉県 和光市
- あちこち日本語ご紹介〈海外編〉..... 5
ミャンマー ヤンゴン
- 教材紹介 6
『新完全マスターズ文法 日本語能力試験 N4』
『新完全マスターズ漢字 日本語能力試験 N3』
『日本語教育叢書「つくる」聴解教材を作る』
- なんでも情報 BOX 8

巻頭
寄稿

日本語教育教材としての落語

—日本語教育のお手伝い—

柳家さん喬

落語家



落語などという芸能は日本人にしか理解できないものだと思っていました。日本人の感性や奥底に流れる人情を400年かけて培い、今に受け継がれてきたこの芸能が、ナイフとフォークで食事をし、ジュースやコーラで喉を潤し、ワインやウイスキーで世を語り、バイオリンやピアノなどで音楽を楽しむ、そんな文化の違う世界の人には、分かりようがないと思っていたのです。

—お手伝いのきっかけ

そんな時に、旧知の筑波大学の酒井たか子教授から「留学生に落語を聞かせてあげたいのですが」と話があったのです。「無理でしょ、外国の方に落語は分からないと思いますよ」と半ば否定的でしたが、それでも酒井先生の要請に応える形でお引き受けすることにしました。これが私にとって日本語教育の教材として落語を演じることの始まりとなったのです。1994年頃だったと記憶しています。

その時はまだ、どうやって落語という芸能を理解してもらい笑ってもらうかしか考えられませんでした。酒井先生といろいろ話し合う中で、私自身が落語を演じるほか

に、留学生の皆さんにも落語を演じてもらうことにしたのです。落語を身近に感じて興味を持ってもらえたら嬉しいし、さらに日本語の表現を学ぶのに役立つのではないかという思いからでした。演じるのは、落語といっても20分や30分の断でなく、俗に言う小咄です。古典落語の中で「まくら」と呼ばれる本題に入る前の世間話の部分で演じられる日本的小咄がほとんどですが、西洋的な笑い話も含めて20ぐらいの小咄を用意しました。

学生さんたちは、扇子と手ぬぐいを持って高座の座布団に慣れない正座をし、両手をついておじぎをして、覚えてきた小断を披露します。その後で、私が学生に、少しアドバイスをします。お父さんと子どもの会話だから視線はこのようにと実際に動いてみたり、遠い人と近い人に呼びかけるときの声の出し方の違いや、仕草や間の取り方など、ほんの少しのヒントなのですが、演じ方がみごとに変わり、聞いている人の笑いも大きくなりました。

—文化の違いに合わせた背景説明

思わぬところで戸惑うこともありました。



時に説明を入れながら

この箱の中にねずみを捕まえたよ。大きいねずみだったよ。
いやそんな事はない。小さいねずみだったよ。
いや、大きかった。
いや、小さかった。
大きかった。
小さかった。
と言い争っていると、箱の中でねずみが「チュウ〜(中)」

ところが「チュウ」で笑いがおこりません。酒井先生がいろいろな国の留学生に、「ねずみは国ではなんて鳴くのと聞くと、しばらく考えて、首をひねりながら「チツチツ」かな、「ピッピッ」かな、とか、挙句の果ては「ね

ずみは鳴きません」というのです。文化の違いに気づかされました。その後この話をするときには、日本ではねずみは「チュウチュウ」と鳴くんですよ、と説明をしてから始めます。

金ちゃん、家に遊びにおいでよ。
やだい、金ちゃんち狭いんだもの。
大丈夫だよ、おとうちゃん筆筒売っちゃったもの。

これは日本の昔の長屋住まいの様子や生活を理解していないと分からない小咄です。この噺の時には長屋の説明や、このことから見えてくる背景などを説明しました。

留学生の国の小咄を落語仕立てにして演じてもらったこともあります。落語という形を使えば、いろいろできるという可能性にも気づかされました。こんなことがきっかけになり、定期的に大学へ伺うようになりましたが、それでも古典落語の本来の魅力は外国の方には理解してもらうことは出来ないと、かたくなに思っていました。

一心を伝える落語でリピーター続出

それが2000年秋にパリで行なわれフェスティバル・ドゥ・オウタム・ア・パリに参加して私の考えは覆されたのです。その催しはパリ市文化庁の主催で行なわれた「世界の語り」というものでした。今も受け継がれている説教的な法話、語り部的な民話など、話すことだけを主にした伝承者たちが世界7カ国から集まり、自国の言葉で語りかけるのです。私は日本の語り芸、落語を紹介してきました。

「人間の言葉は本来は音である。その音の集合が言葉となっている、だからどの国の人間も他国の言葉の発音が出来。それは音として捉えるからである。従って言葉としてではなく音として捉えれば理解できるはずだ。」

という主催者側の考えで、通訳や翻訳はなしというのです。しかし、落語を演じたところでフランス人の聴衆に分かってもらえるとも思えません。そこで開演前にフランス語で簡単に説明したものを配っておいたり、必要最小限の言葉だけをテロップにして流してもらいました。このことに協力してくださったのがパリの第六大学で教鞭を執っていらっしゃるアン坂井先生です。先生は



机で作った即席の高座で一席

日系二世で日本で落語の研究をなさりフランスで落語に関する本を数冊出されていて、私も寄席の楽屋で何度かお会いしたことがある方でした。

半信半疑と言うより全疑の気持ちを持ちながら日本で演じるとおりに噺を始めました。気の長い人と気の短い人のやり取りを面白く作り上げた「長短」という噺です。気の長い長さんが、気の短い短七さんの家を訪ねるところから始まります。「こっちへ入りなよ」と声をかける短七さんが、隙間から覗き込むだけでなかなか入ってこない長さんに、業を煮やして「こっちへ、へいりな(入りなよ)!!!」と怒鳴るのです。それに「やー!そこにいた?」と平然と答える長さんの台詞が続きます。冒頭から二人の性格をはっきり出さなくてはいけない噺です。

話し始めてわずか1分ほどのこの場面で、フランス人の観客は日本人が笑うのとかなり変わりなく笑ったのです。それまで重い気持ちで話し始めていた私の気持ちは急に楽になりました。それから随所のくすぐり(笑う箇所)も分かったようで最後まで話し終えました。次の子供を主役にした「初天神」を演じ終えた時には、立ち上がり大きな拍手を送ってくれたのです。高座からおりてもその拍手は鳴り止まず、係りの方に促されてアンコールに再び顔を出しましたが何をやる事も出来ずただただ頭をさげてニコニコすることしかできなかったことを思い出します。

そして最終日には、多くのリピーターが子供や友達をつれて観にきて、大人も子供も良く笑ってくれました。私は言葉は感情を伝える大切な道具であることを知らされた様な気がしました。言葉があるから感情ができたのではなく、感情をなんとか伝えたいと思うところから言葉が生まれたのか

もしれません。それぞれ国の言語が違って人間の間隔は、言葉の隔たりを飛び越すもので、だからこそ正確な言葉で伝えなくてはならないのであり、ただ言葉を伝えるのではなく心伝えるのだと思うことが大切なのだと思えました。

一本当の日本語教育のお手伝い

パリでの拍手が、外国の方には落語の奥底は理解できないという私の偏見を改めさせてくれました。それからは、日本での留学生のための落語はもちろん、外国へ出向いての日本語学習者のための落語公演も喜んで行かせていただいております。2006年には、米国インディアナ州パデュー大学で日本語の教授をなさっている畑佐先生からバーモント州ミドルベリー大学の日本語のサマースクールで落語ウィークとして落語を授業に取り入れたいとのご相談を受けて、喜んでお受けしました。落語をどのように授業として取り入れるか暗中模索でしたが、今も続いています。2012年は、チェコ、ハンガリー、フランス、2013年にはハンガリー、フランスでの公演を行ってまいりました。

日本語を学んでいる学生さんとのふれあいの中で、落語を聞いていただき、学生さんから言葉を通してそれぞれの文化を学ばせていただくようになってきた今、落語が本当の意味で日本語教育のお手伝いができるようになったと思っています。

柳家さん喬 (やなぎや・さんきょう)

落語家。
落語協会常任理事。
1967年、5代目柳家小さんに入門。1987年、文化庁芸術祭賞受賞。
2012年、平成24年度(第63回)芸術選奨 文部科学大臣賞受賞(大衆芸能部門)。

学習者の目

View from the Other Side

このコラムでは、学習者の視点での話題をお届けします

日本語で通じ合う事が日本語学習のモチベーション

日本語学校で学ぶマクファーソンさんに聞きました

—日本語を勉強しようと思ったきっかけは？

高校生のころカラテが大好きで、道場に通っていました。道場の日本語を覚えたいと思い、まずは日本語の本で、そしてインターネットを使って自分なりに、日本語の勉強をはじめました。ネット上でPENPALをつくりました。日本語を使いたかったんです。ローマ字を使ってのやりとりで「dozo yoroshiku onegai shimasu」とか、そのくらいの日本語からはじめましたが、この時に会ったPENPALたちとは、2008年に日本全国を旅行したときに会うことができました。彼らと日本で会ったときには、ほぼ日本語で話すことができるようになっていました。そして、日本語を勉強すればするほど好きになりました。

2005年に高校を卒業しマニトバ州立大学に進学しました。専攻は心理学でした。大学で日本語のクラスを3年間受講しました。3年間で2回日本語スピーチコンテストで優勝しました。最初は「さよなら」という題名で一期一会についてスピーチ。ちょっと悲しいテーマでした。次は「流暢の意味」。これは言葉に限りませんが、流暢という言葉は題材に、本当の実力や能力とはなにか、それらの実力、能力というものははかりにくいというような内容でした。

—群馬県の太田市に、3年間いらっしたのですね。

2010年から3年間、ALT（外国語指導助手）として日本の高校で働くことができました。この3年間は2つの高校で英語を教えました。授業の後は日本語で生徒たちと話したりして、その時間がとても楽しかったです。ALTの派遣期間が終わり学校を去るときに、生徒の前でスピーチの機会をもらいました。この場で自分が泣くとは思っていませんでしたが、目から涙が



マクファーソン・リーさん

1987年5月5日生まれ。現在26歳
カナダ マニトバ州 ウィニペグシティ出身。
カラテをきっかけに日本語に興味を持ち、独学後、マニトバ州立大学で日本語クラスを受講。
2010年群馬県太田市にALTとして来日。現在、
アークアカデミー新宿校で日本語の勉強中。

あふれてきました。生徒たちも泣いていました。日本の高校生たちの学校や友達への愛着は私が育ったカナダとは違うような感じがしました。

—日本語の勉強を続けるモチベーションはなんですか。

カラテは私を変えてくれました。私は茶帯（黒帯のひとつ前）をとりましたが、そこにあまり意味を感じていません。日本語も同じでN1、N2というのは仕事を探したり、進学するときには必要かもしれませんが、本当はあまり意味を感じていません。N1、N2はそのレベルを示してくれはしますが、本当にうまいかどうかはわからないからです。日本語を勉強していて自分の日本語がうまくなったと実感するのは、2年前にはわからなかったアニメが今はわかるようになっていたりすることや、誰かと話をして通じ合ったときなどです。そのような時に

勉強を続けるモチベーションが高まります。

—日本語の勉強のコツを教えてください。

たとえば漢字ですが、ひとつの漢字にお話を作ります。何回も書くより楽しいです。辛さが軽くなります。たとえば、

- 1) 好：女の子が好きです！
- 2) 親：木に登って、立って見守ったのか？
なんていい親じゃないか？
- 3) 音：太陽（日）の上に立ったら、音がなります。

などなどです。

他に何人かのグループで話をしている、回りの人が笑っているのに、自分は意味が分からず笑うことができない、テレビを見ている、なんで笑っているのかわからない、そんなときがとてつらいです。その反対は、とっても楽しいですね。話すチャンスは逃さず、わからなかったら、勉強して次に再チャレンジするということです。このような日本語を使う機会を大切にしています。日本が好きだということも大事ですよ。

—これから日本語を使ってなにかしようというプランはありますか。

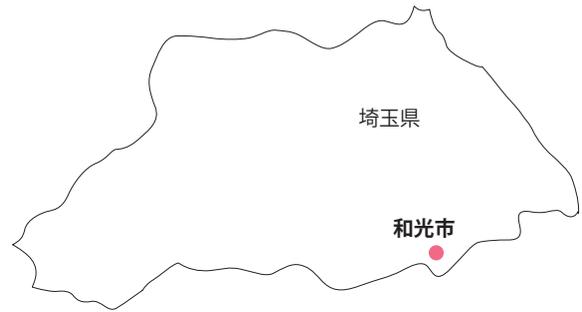
近い将来は心理学を勉強できる大学院に進学しようと思っています。カナダなのか日本なのかはわかりません。ですので、そのときに日本語が必要かどうかはわかりません。将来のことを考えると、日本語が必要でない可能性のほうが高いと思いますが、今は日本にいる自分以外はイメージできませんし、仕事などに必要だからではなく、ただ好きなので日本語を勉強しています。これからの目標ですが、いつか近いうちに心理学関連の本を、あえて日本語で読んでみたいです。心理学と日本語と好きなことをふたついっしょにできるんですから素晴らしいと思います。



日本語で紹介

国内編

埼玉県 和光市



日本語教室活動を軸とした国際交流

和光国際交流会会長

近長 武治

和光市は、埼玉県南部の人口8万人の近郊都市です。和光国際交流会は、この地域に在住する外国人の日本語学習を支援するため、日本語教室を開いています。ボランティアとして活動している人は約35人ですが、これまで約40か国、約300人の外国人が日本語を習うために通ってきてくれています。

私たちの願いは、外国の人たちが「日本に来て本当によかった。和光の日本語教室はよかったなあ」と言われるようになってほしいということです。和光国際交流会の日本語教室の特徴は、次のとおりです。

- ① 少人数(1人～3人)ごとに教えます。
- ② 進度や教え方は、学習者に合わせます。
- ③ 日本語を使って日本語を教えます。

初めて日本語を習う人にも日本語を使って教えます。初めは、教えるほうも習うほうも苦勞がありますが、学習者は自然に日本語で考え、そのまま日本語で話す力がついてきます。

④ テキストは、『みんなの日本語』の初級Iおよび初級IIを使います。初級の段階が終わると、ほとんど日常生活に不自由しない程度の日本語の力がついてくるようです。

⑤ さらに勉強したいという希望もありますので中級や上級のコースもあります。

礎となった養成講座

和光国際交流会の日本語教室は、16年前の平成10年4月に開講しました。しかし、実際の歴史は、その1年前に始まっています。もともと和光国際交流会は、市民を主体とした国際交流を推進するための団体として発足しましたので、当初はさまざまな交流活動を行っていました。それらの活動をして

いるうちに外国人の会員から、日本語を習いたいという希望があり、これに応えようということになりました。そこで、長年日本語教師として活動していた方に相談したところ、「日本人であれば日本語がペラペラなのだから、ボランティアとして問題ないと思われるかもしれませんがそれは大間違いです」、また「皆さんが日本語インストラクターになれば活動の裾野が広がるはずですよ。私が講師を引き受けますから、インストラクターの養成講座をやりましょう」というご意見でした。そして平成9年6月から「日本語インストラクター養成講座」が始まりました。

6か月間、毎週土曜日2時間ずつ、24回の講座は、内容も体系的で充実しており、教え方もきちんとしていました。講師の先生は、後日「この養成講座における充実した日々は、一生の宝物です」と述懐していらっしゃいます。

第1回の養成講座が終了し、PR、会場の確保、学習者の募集、運営のシステム作りなど、いろいろと苦勞もありましたが、いよいよ日本語教室が開講の運びとなりました。養成講座から始まった一連の事が現在の日本語教室の礎となっているわけです。

和光国際交流会では、すでに日本語インストラクターになっている人のために、随時、「日本語研究会」というミーティングを開き、スキルアップや情報交換を行っています。具体的には、インストラクター同士のワークショップ方式の勉強会、外部から専門家を招いての研修会などです。

「日本語インストラクター養成講座」や「日本語研究会」は、和光国際交流会の日本語教室にとって重要な行事です。その底流にあるのは、「ボランティア活動であっても、専門的な知識を培い、きちんと教える」ということではないかと思っています。



進度や教え方は学習者に合わせるのが基本

勉強ばかりでなく

和光国際交流会では、日本語教室の学習者を中心として、さまざまなイベントを開いています。例えば、「日本語学習者発表会」では、外国人学習者が大勢の会員の前で、習い覚えた日本語を使って、思い思いのテーマで短いスピーチをします。発表した人の人柄やその国の文化も感じられます。「料理教室」では、外国人学習者に講師をお願いして、その国の料理の作り方を日本語で教えてもらいます。ベトナムの生春巻き、韓国のサムゲタン、スリランカのカレー料理など。

春には近くの公園で「お花見の会」を開きます。食べ物や飲み物は、参加者の持ち寄りです。年末には、イヤーエンドパーティーを開きます。さまざまな余興もあり、外国人会員との楽しい集いです。

活動の基本となるのは

さて、ボランティア活動の基本は、参加する人がどのような活動に生きがいや意義を感じるかという視点で考えなければなりません。和光国際交流会は、これまでの歴史の中で、さまざまな模索をしながら会員が知恵を絞り、汗を流して、今日に至っています。“もともと地上に道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ”この言葉を座右の銘にして、これからも進んでいきたいと思っています。



日本語ご紹介

海外編

ミャンマー ヤンゴン



教室での真剣な授業の様子

現在のミャンマーの日本語教育

MAJA ミャンマー元日本留学生協会 副会長
シー・シー・シエン

ミャンマーでの日本語教育について語るには、50年前の日本語教育から始めなければなりません。なぜなら、その時の日本語学習者達が日本語を学習した目的と現在の学習者の目的とはかなり異なった点があるからです。当時の学習者はほとんどが日本へ派遣される外交官や国費で日本へ留学する人達で、興味をもって日本語を勉強したいという人は少ししかいなかったからです。それで、その目的は日本の生活に困らないための日常会話や、簡単な日本の文化紹介程度でした。

しかし、日本語学習も時代とともに変化してきました。学習者の目的、理由、背景なども多様化されました。現在の主な学習者は日本への留学、就職のため、通訳・翻訳、または JLPT を受けるための人もいれば、ガイドになるための人もいます。

現在、ミャンマー国内にはヤンゴン大学やマンダレー外国語大学などの高等教育機関のほか、ヤンゴン市内だけでも民間の日本語学校が60校以上登録されています。マンダレーなどほかの地域にも数10校あり、それぞれの学校が学習者のニーズに応じて日本語を教えています。総合日本語、ビジネス日本語、日本留学応用コース、ガイドのコース、日本語能力試験対策コースなどです。学習者の年齢も10代から50代とさまざまです。

MAJA について

日本語教育を行っている民間の施設にはミャンマー元日本留学生協会(MAJA: Myanmar Association of Japan Alumni)が運営する MAJA 日本語コース、MAJA センターと MAJA-OKAYAMA センターが含ま

れています。この MAJA 組織は NPO 団体です。日本での留学経験を持つ人たちが 2001 年に設立した団体です。日本大使館などと協力して日本留学試験などの試験やスピーチコンテストを行っています。また、MAJA 日本語コースをはじめとした日本語学校の運営を行っています。

MAJA 日本語コースは 2009 年に設立されました。その活動の指針は日本語紹介、及び日本語活動を通じて親日層の拡大に貢献することです。目的としては、日本及び日本語に関心を抱くミャンマー人に対して、生きた日本語と日本文化を紹介することにより、より一層日本に関心を持ってもらうこと、日本語に関心を持つ日本留学経験者の日本語の維持とブラッシュアップを併せて行うことです。すべてボランティアで、授業料不要、コピー代や教師の移動費などの実費だけを払います。年に3回行われていて1コースは10週間です。学生のニーズに応じて N4 レベルの会話、DVD を使った聴解、日本文化、漢字実習などのコースがあります。学生は会社員もいれば大学生、時には高校生もいます。毎週月曜日から金曜日まで自分のニーズに合わせて好きな科目を勉強しています。観光ガイド、日本企業への就職、日本留学、JLPT 受験などの目的で、毎回 30～50 名の学生が勉強しています。2013 年度は 128 名の学生が受講しました。

MAJA センターは 2012 年に設立されました。MAJA センターは MAJA 日本語コースと同様に人材開発を中心としています。しかし、MAJA センターはボランティアではなく民間の機関として、日本語教育以外にミャンマー語教育、通訳・通訳のサービスなど日本の団体や企業にさまざまなサービスの提供を行っています。

日本語教育では、ビジネス日本語、通訳・翻訳、日本語会話、初級日本語、中級日本語、

上級日本語、能力試験対策、読解・聴解、などを中心としています。日本大使館、JASSO、ヤンゴン日本人商工会所、JAPAN FOUNDATION などと日本語学習のための活動も行っています。

MAJA - OKAYAMA センターは 2013 年に岡山大学の支援で設立された資料室です。このセンターの主な目的はミャンマーでの人材育成のための日本語や日本文化に関する知識や情報の提供をすることです。日本語が自由に学べるパソコンが7台おいてあります。図書室もあり 200 冊以上の日本語の教科書やビジネス、日本語会話や日本の文化についての本があります。日本語や日本について興味のある人はこの施設を使うことができます。日本の大学へ留学したい人も大学の情報や、JLPT に関する情報なども調べられます。

これからの活動

MAJA では自由に日本語の学習ができるほか、日本留学や、日本企業への就職のチャンスを得ることもできます。

MAJA センターでの学習者もかなり増えました。2013 年の日本語学習者の数は 200 人以上でした。日本語学習者の数が増加するにしたがって日本語授業をもっと拡大し、同時に学生のレベルもあげていきたいと思っています。そして、MAJA センターのなによりも重要な将来の計画と目的は MAJA ものづくり Technical Institute を設立することです。そこでは、学習者に日本の工場に働くのに必要な技術だけではなく、通訳、翻訳者の養成や、日本のカウンターパートと一緒に働くときに必要な日本人のマナーや習慣なども実習します。MAJA センターでは以上のような産業者のための MAJA ものづくり Technical Institute 設立に向けて様々な活動を始めています。

教材紹介

新完全マスター文法 日本語能力試験 N4

友松悦子・福島佐知・中村かおり 著
本文 約 150 頁 別冊 10 頁 1,200 円

Now
Printing

複数の視点から文法の足固めを！

友松悦子

日本語能力試験 N 4 の試験科目である、言語知識(文法)の対策を主目的に、初級後半の文法を短期間で総復習するための教材です。N 4 レベルの文法学習では、話者の希望、意志、相手への働きかけ、提案、推量など、日常の言語生活においてどうしても必要になる意味機能を持つ文法形式を学びます。また、日本語の文法の基本的なルールを学ぶこともこの時期の大切な学習内容です。

本書の第 1 部では、出題が予想される文法形式を意味機能別に 25 の課に整理し、各課

に 2, 3 項目を提示しました。左ページにはその例文と解説、右ページには確認のための練習問題という構成なので、1 課が見開き 2 ページです。

第 2 部では、意味機能とは違う切り口で初級文法のポイントを整理しました。例えば間違えやすい助詞の使い分け、て形の用法、自動詞と他動詞、「てきます」と「ていきます」、「こ・そ・あ」などです。これらは日本語文法の基本的な約束ごとなので、中・上級の学習の土台とも言えるでしょう。第 2 部も見開き 2 ページで完結。第 1 部と同様、解説は日本語・英語併記で、独習できるようになってい

ます。

また、文を作るときは、それぞれの文法形式に合うように前に来る語の形を整えなければなりません。これが正しくできるようになることは、日本語文法習得の第一歩です。そのため本書では、実力養成編の前に「形の練習」編を設けました。形の作り方を確認したり練習したりしながら文法形式や文法のポイントを学べば効果が期待できます。

この先日本語能力試験のさらに上の段階を目指すためには、まず、日本語文法の基本を習得することが必須です。本書がその足がかりとしてお役に立つことを願っています。

新完全マスター漢字 日本語能力試験 N3

石井怜子・青柳方子・鈴木英子・高木美穂・森田亮子・山崎洋子 著
本文 約 130 頁 別冊 50 頁 1,200 円

Now
Printing

漢字の「個性」に合わせた学習法で漢字を習得！

石井怜子

日本語能力試験 N4 程度までの漢字 300 字の学習を終えて、中級に入る学習者の方を対象とした漢字教材です。25 回で N3 レベルの 354 字の漢字を中心に学びます。

本冊のほかに別冊の「漢字と言葉のリスト」があり、まずこれでその回に学習する漢字と言葉を予習し、本冊の問題を解きながら漢字を身につけていくようになっています。「漢字と言葉のリスト」は、N3 レベルの語に中国語と英語の訳がついています。また本冊の随所にイラストを使ったり、漢字の組み立てに注目する問題を取り入れたりすることで、非漢字圏の学習者も自習ができるようにしてあります。

本書の最も大きな特徴は、第 1 に、既刊

の『新完全マスター漢字日本語能力試験 N2』『同 N1』と同様、「漢字は語の表記に必要なもの」という立場から、N3 レベルの学習者が漢字を語として文の中での使い方が学べるように工夫してあること、第 2 に、354 字の漢字のそれぞれの「個性」に応じて学習することです。

第 2 については、漢字の「個性」っていったい何、と思われるかもしれませんが。私たちは、漢字は単に「文字と読みがあるもの」ではなく、音読みで使われることが多く、いろいろな語の一部となる漢字、主に訓読みで和語として使われる漢字、たくさんの読み方をしていろいろな使われ方をする漢字、というように、「個性」を持っており、それに応じて学習のしかたも変えるべきだと考えます。そこで、本書を次のような構成にしました。

- 第 1 部 一つの漢字で言葉になる漢字
 - 第 2 部 たくさんの言葉を作る漢字
 - 第 3 部 場面の言葉を作る漢字
 - 第 4 部 音読みと訓読みを覚える漢字
 - 第 5 部 たくさんの読み方がある漢字
- 第 1 部では、訓読みだけを学ぶ漢字を対象に、その漢字を使った語として漢字を学びます。第 2, 3 部前半では音読みのみで熟語を作る漢字を、そして、第 2, 3 部後半と第 4 部では音読みと訓読み両方を学ばなければならない漢字を学習します。最後の第 5 部で多くの読み方がある漢字をまとめて学習します。

本書が単調で大変な漢字学習というイメージを少しでも払拭し、実際の漢字の使用に即した力をつけるお役に立てればと願っています。

日本語教育叢書「つくる」

関正昭 土岐哲 平高史也 編



教科書・教材作りのプロセスノウハウが満載！

「日本語教育叢書つくる」は、自分の手で教科書・教材を作りたいと思った時に、これまで蓄積された教材作成の知見を得られる参考書です。

1. 教科書・教材作りのプロセスとノウハウを紹介し、次の教科書・教材作りに役立つ
2. 教科書・教材作りのプロセスを記録する
3. 未来につなげるための新たな教材論の展開を促す

以上3点をシリーズ執筆の趣旨として、教科書・教材の「作る前」「作るとき」「作った

後」にどのような作業、視点が必要なのかを、実際に教材・教科書を執筆した著者が当時の経験をもとに改めて記述しています。どの巻も教科書として1冊にまとめたときはもちろん、明日の授業の教材をどうしよう、今学期の学習シラバスをどうしよう、といった日々の授業の構成やプリント作成の参考資料としても使える具体的な内容です。

全8巻のシリーズで、現在6冊目となる『聴解教材を作る』が2014年5月に刊行予定です。

シリーズラインナップ

会話教材を作る	尾崎明人ほか	1,800円
漢字教材を作る	加納千恵子ほか	1,800円
読解教材を作る	平高史也ほか	2,000円
作文教材を作る	村上治美	1,800円
テストを作る	村上京子ほか	1,800円
聴解教材を作る	宮城幸枝	2,000円
音声教材を作る	江崎哲也ほか	未定
教科書を作る	関正昭ほか	未定

日本語教育叢書「つくる」聴解教材を作る

関正昭・平高史也 編 宮城幸枝 著

本文 約250頁 2,000円



聴解指導を音声言語処理から考える

東海大学国際教育センター 宮城幸枝

聴解指導の目的は何でしょうか。もちろん「聞く」技能を高めるためでしょう。しかし、それだけではありません。私たちは読んだり、書いたりするとき（文字言語の情報処理）にも、音声のイメージを手がかりにしています。すべての言語活動の情報処理プロセスにおいて、音声情報処理が重要な役割を果たしています。このような考えから、音声言語のインプット教材として多角的に活用できる教材を目指して、『毎日の聞きとり』シリーズ（初級・中級・中上級：凡人社刊）を作成してきました。

その経験もふまえ、本書第1章では、まず、言語の運用に音声がかどのように関わっているのか、私たちはどのようにして言語情

報を処理しているのか、なぜ音声言語の習得が大切なのかについて概観します。次に、聴解活動に関わる要素をとりあげ、学習者の困難点は何かについて考えます。第2章は具体的な作り方についてです。初級聴解教材については、どのような指導目的にもとづいてタスクを作成したか、どのような工夫をしたかについて具体例を示しながら詳しく述べました。また、中級聴解教材については特に、読解の文章とは異なる聴解用の談話（音声テキスト）の作成法について、例を挙げて具体的に説明しています。そして、第3章では、さまざまな指導法と指導の意味、期待される効果について述べました。

音声は流動的であり、目に見えない物理的な刺激でとらえにくいという特徴があります。また、外国語の音声を聞くときには音声

情報入力（認識）の段階で母語や既習の言語音声の干渉を受けやすいので、入力段階の音声認識や情報処理の力が音声言語の理解や習得に大きく関わります。音声言語教育の大切さ、聴解力の基礎になるボトムアップ処理の大切さについて考えるきっかけとして本書を活用していただければ幸いです。



なんでも情報 BOX

Books ほん

みんなの日本語初級Ⅱ第2版漢字練習帳	6月発行予定	1,200円
みんなの日本語中級Ⅰ翻訳・文法解説ベトナム語版	6月発行予定	1,600円
みんなの日本語中級Ⅱ教え方の手引き	6月発行予定	2,500円
日本語教育叢書「つくる」聴解教材を作る	6月発行予定	2,000円
新完全マスター漢字 日本語能力試験N3	6月発行予定	1,200円
新完全マスター文法 日本語能力試験N4	7月発行予定	1,200円
留学生のためのアカデミック・ジャパニーズ 聴解 中上級	7月発行予定	2,000円

スリーエーネットワーク・凡人社合同企画 日本語サロン研修会 in 大阪

日時：6月29日(日) 13:30～16:45

(13:00 受付開始)

会場：愛日会館 3階多目的室

(大阪市中央区本町 4-7-11)

内容/スケジュール(予定)

13:30 研修会1

「教室の中と外をつなぐために：インターアクション教育の試み」

講師：日本語でインターアクション著者

教材：『日本語でインターアクション』

今回の研修会では、接触場面での日本語のインターアクションを意識して開発された『日本語でインターアクション』を軸に教室の中と外をつなぐためには何が必要かをみなさんと一緒に考えたいと思います。

15:15 研修会2

「社会生活のいろいろな場面で上手にコミュニケーションできる力をつけるためには」

講師：清水崇文(上智大学言語教育研究センター、同大学院外国語学研究所教授)

教材：『みがけ! コミュニケーションスキル 中上級学習者のためのブラッシュアップ日本語会話』

今回の研修会では『中上級学習者のためのブラッシュアップ日本語会話』を例として、社会生活のいろいろな場面で学習者がコミュニケーションできる力をつけることをテーマに参加者の皆さまと考えていきたいと思ひます。

定員：80名(先着順。定員になり次第締め切ります)

参加費：1,000円(税込)

申込み：電話、ファクス、Eメール、郵送のいずれかで下記まで。電話以外の場合は、「氏名、電話番号、グループで活動中の方はグループ名」を明記してください。

問合せ/申込み先：凡人社(営業部坂井)

千代田区平河町 1-3-13 ヒューリック平河町ビル 8階

TEL: 03-3263-3959 FAX: 03-6733-7887

Eメール: ksakai@bonjinsha.co.jp

主催：スリーエーネットワーク・凡人社

* 当日、各研修の題材書籍や日本語教材の展示・

販売を予定。会場限定での割引あり!

地域で活動する日本語ボランティアのための 研修会 in 福島

日時：7月5日(土) 13:30～16:55

(受付開始 13:00)

会場：ビッグパレットふくしま 3階小会議室2+3 (福島県郡山市南二丁目 52)

内容/スケジュール(予定):

13:30 研修会1

講師：辻垂希子(日本語教師、ライター)

教材：『日本語教師のための楽しく教える活動集

22 子ブタの日本語お道具箱』

「私の授業、学習者はどう思っているかしら…楽しんで参加しているかしら…」そんな悩みをお持ちのあなたに、授業を楽しくするノウハウを伝授いたします! お道具箱のアイテムをあなた色に七変化させ、授業で開花させるお手伝いをします。

14:40 研修会2

講師：大久保雅子(東京大学教養学部 非常勤講師)

教材：『シャドーイングで日本語発音レッスン』

シャドーイングを授業に取り入れてみたいと考えていても、実際にはよくわからない。あるいはシャドーイングは知っているし、ときどき授業では使っている、でも実際にはただ繰り返させるだけという先生もいらっしゃるのではないのでしょうか。それではせっかくの授業ももったいない! シャドーイングにはどんな方法があるのか、どのように学生を指導すればいいのか、シャドーイングを授業に取り入れるノウハウをお伝えします。

15:55 研修会3

講師：齋藤美幸、沼田宏、加藤早苗(インターカルト日本語学校)

教材：『きらり☆日本語』

『きらり☆日本語 N4/N5 語彙』を参考に、暗記するだけじゃない、体系的に、楽しく、自律的に語彙を学習・指導するヒントをご紹介します。学校型のクラスだけではなく、地域の日本語教室などでの学習の例も多く取り上げ、具体的に、どのようにしたら効果的に語彙を身につけられるのか、どんな練習や活動に展開できるのか、みなさんと一緒に考えていきます。

定員：70名(先着順。定員になり次第、締切ります)

参加費：無料

申込み：お名前、連絡先、ご所属を明記の上、下記宛お申込みください。

問合せ/申込み先：凡人社(営業部坂井)

千代田区平河町 1-3-13 ヒューリック平河町ビル 8階

TEL: 03-3263-3959 FAX: 03-6733-7887

Eメール: ksakai@bonjinsha.co.jp

主催：アルク・スリーエーネットワーク・凡人社

Ja-Net68号別冊のweb版掲載について

前号のJa-Net68号巻頭寄稿では、コミュニティーデザイナーの山崎亮さんのインタビューを掲載しました。2ページでは収まりきれない充実した内容で、紙面に掲載しきれなかった内容もあります。そこで、その中でも、具体的な内容を中心に、別冊としてweb版でご紹介します。

<http://www.3anet.co.jp/janet/> をぜひご覧ください。

Ja-Net | No. 69 季刊ジャネット

スリーエーネットワークという社名は、アジア (Asia)、アフリカ (Africa)、ラテン・アメリカ (Latin America) のいわゆる発展途上国の多くが存在する三つの地域をネットワークでつなぎ、相互理解と友好促進を図ろうという趣旨をシンボライズしています。

2014年4月25日発行

● 発行人 藤寄政子

● 発行所 (株)スリーエーネットワーク

営業広報部 Ja-Net 編集室

〒102-0083 東京都千代田区麹町 3-4

トラスティ麹町ビル 2F

TEL: 03-5275-2722 FAX: 03-5275-2729

E-mail: sales@3anet.co.jp

<http://www.3anet.co.jp/>

● 印刷 日本印刷(株)

© 2014 by 3A Corporation Printed in Japan

(禁無断転載)

● 『Ja-Net』をご希望の方はお名前・ご住所・ご所属を編集室までお知らせください。無料でお送りいたします。『Ja-Net』第70号は2014年7月25日発行です。